

子ども一人一人のニーズに応じ、学習を支える特別支援教育の推進 ～町教委と学校の組織的な取組～

千葉県白子町立白瀉小学校 長島 正明

I 現状と課題

1 現状認識

学校教育法の一部改正により、平成19年4月から、これまでの特殊教育に変わり特別支援教育がスタートした。

また、平成24年7月に中央教育審議会が、「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進」について報告を出し、学校現場でも特別支援教育の推進に向けた努力が続けられてきた。

平成26年に白子町教育委員会でも現状を把握するため、通常学級において、特別な支援を必要とする児童生徒を調査したところ、白子町の三小一中で8.2%の児童生徒が該当することがわかった。また、その調査で、本校でも支援の必要な児童が13.4%も在籍していることがわかった。

2 課題分析・アプローチの視点

町教委は、特別支援教育支援員を各校1名ずつ配置し、効果を上げることができたが、すべての児童生徒をカバーすることはできなかった。このような現状を改善するために、町教委は文科省の「発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期支援研究事業」に応募し、指定を受けた。

そして、本校は、研究事業の中核校として研究を進めることになった。

II 研究の概要

1 取組の視点

本校が、文科省の研究事業の中核校として、町教委と連携を図りながら研究を推進していくためには、校長がどのような役割を果たせばよいのかを考え、次の5つの視点に沿って取り組んだ。

- (1) 経営ビジョンの明確化
- (2) 学校全体での取組
- (3) 適切な人材配置
- (4) 町教委との連携
- (5) 保護者や保小中との連携

2 取組の実際

- (1) 経営ビジョンの明確化

特別な支援が必要な児童を含めて、すべての児童が楽しく教育活動に取り組めるようにユニバーサルデザインの視点を取り入れた教育活動を経営の重点とした。

- (2) 学校全体での取組（校内研修）

ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業研究や校内環境の整備に取り組んだ。また、理解や表現が苦手な児童には、「個別の支援」を研究することにした。

- ① ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業

ア 焦点化	}	ユニバーサルデザインの3つの視点
イ 視覚化		
ウ 共有化		

- ② ユニバーサルデザインの視点を取り入れた掲示

- ③ 個別の支援

- (3) 適切な人材配置

町教委では、各校2名の特別支援教育支援員と町全体で2名の特別支援教育指導員を配置し、各校の支援体制の充実を図った。

- ① 特別支援教育指導員の配置（町全体で2名）

- ② 校内特別支援委員会の充実（トライアングル）

- (4) 町教委との連携

白子町は、個別の指導計画と教育支援計画を町で統一した形式に改め、町全体で取り組めるようにした。

- ① ひまわりステップ1

- ② ひまわりステップ2

- ③ 町内教職員あて広報誌（はじめの一步）

- (5) 保護者や保小中との連携

白子町では、保護者や保小中とのスムーズな連携を図るために、カードを活用している。

- ① 保護者との連携（三者連携振り返りカード）

- ② 保小中との連携（ひまわりステップ2）

III 成果と課題

1 成果

- (1) ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業を実践したことで、支援の必要な児童が減少した。
- (2) 指導員並びに支援員の配置により校内の支援体制が整い、支援が必要な児童へ適切で素早い対応ができるようになった。
- (3) ひまわりステップ2を活用したことで、保小中の引き継ぎがスムーズに行えるようになった。

2 課題

- (1) 指定期間が終了し、人材や予算が減少する中で、支援体制や教職員のモチベーションを維持することが難しくなっている。
- (2) 教職員の支援が必要な児童への見方は変わってきたが、周りの児童や保護者の理解が十分に得られていない。

IV 提言

- 1 研究事業は終了したが、今後も町教委や保護者と連携を図り、特別な支援の必要な児童への校内支援体制を維持、推進していくことが校長の使命である。

- 2 支援が必要な児童への教職員の支援体制やユニバーサルデザインの視点を取り入れた校内環境は、整ってきた。今後は、個々の児童の困り感の軽減を図ることにより、児童同士の理解につなげ、さらには、保護者理解に広げていく必要がある。